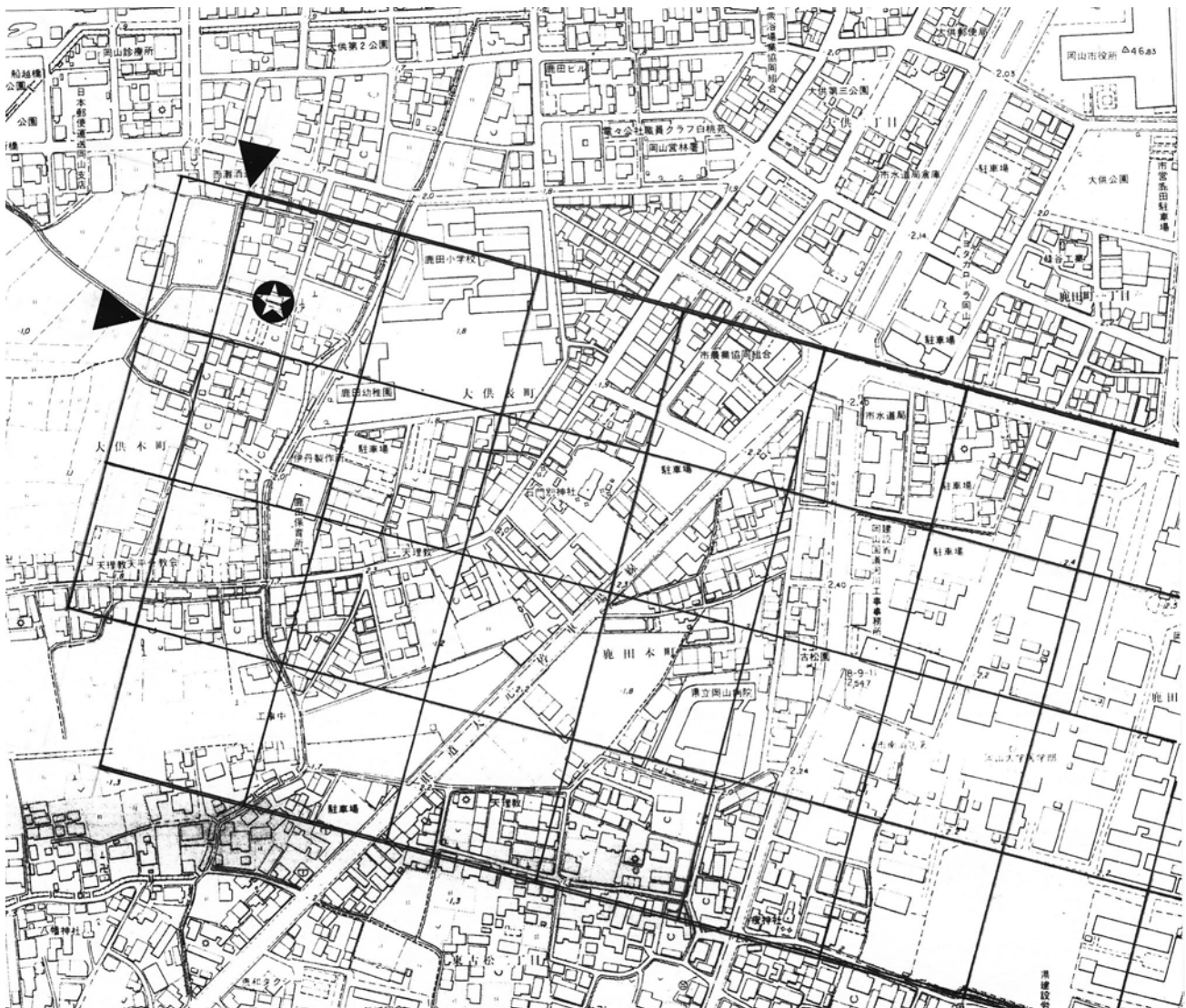


平成 21 年 12 月 26 日

## 大供本町遺跡第 4 次調査現地説明会資料

岡山市教育委員会文化財課  
岡山市埋蔵文化財センター

岡山市教育委員会は、区画整理事業に伴い、平成 21 年 11 月から発掘調査を行っています。面積は、約 500㎡です。



▲：鹿田地割復元起点

★：調査地点

図 1 調査位置図

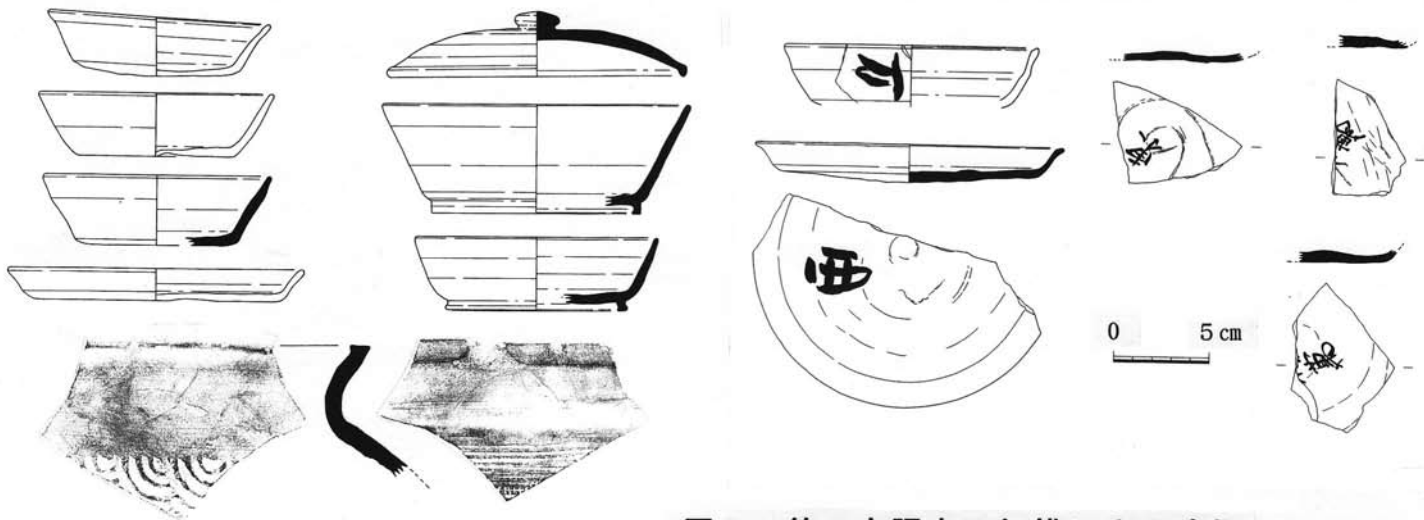


図2 第2次調査旧相模川出土遺物

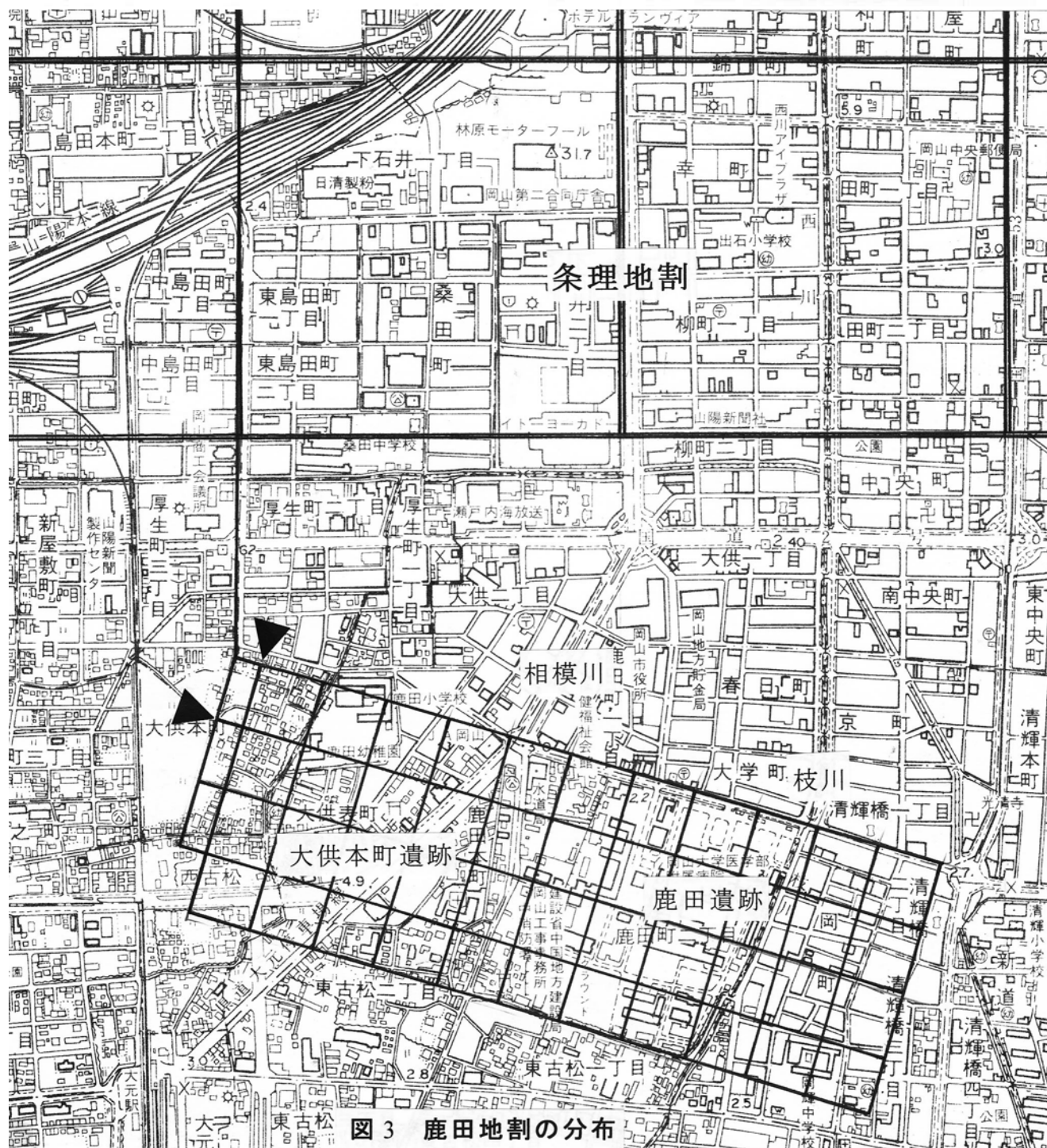


図3 鹿田地割の分布

### 【大供本町遺跡とは？】

まず、大供本町遺跡について説明します。大供本町遺跡は、大供本町周辺に広がる集落遺跡です。平安時代から現代に至るまで連綿と集落が営まれています。江戸時代以前は、すぐ南側に海が入り込んできており、東側の岡大病院の敷地に広がる鹿田遺跡と共に、港湾に関係する集落であったと考えられます。大供本町遺跡と鹿田遺跡には、それよりも北に分布する東西南北を揃えた正方位地割とは異なる方向の地割（図3）が分布しており、両遺跡は共通の地割（鹿田地割）によって規制されています。両遺跡の間には、極めて親縁な関係があったと考えられます。この地割は、1次調査で、9～10世紀に成立していることがわかっています。当地は、奈良時代から平安時代の中央の権力者である藤原氏の宗家が、代々伝領する重要な荘園である「鹿田庄」という荘園があったとされます。大供本町遺跡と鹿田遺跡に分布する地割の成立年代とも重なることから、この地割は「鹿田庄」の成立や、その性格と関連すると考えられます。

### 【今回の調査でわかったことは？】

今回の調査では、室町時代から戦国時代にかけての遺構がみつかりました。遺構とは、柱穴や井戸などを指します。主な遺構としましては、幅が2.5mの堀を巡らした40m×50mの有力者の館跡と、その周辺に溝で区切られた町割の遺構です。館跡は、1次調査でもみつかり、それは今回みつかった館跡の西側に張り出すように付属していたものです（図8）。いずれの方向性も「鹿田地割」と同じです。地割の一貫性は、当初の遺跡の性格が踏襲されていることを示すと思われます。また、それほど広い面積の調査ではないにもかかわらず、井戸が7基もみつかりました。おそらく多くの人が居住した港湾都市であったため、多くの井戸が必要だったのではないのでしょうか。また、「鹿田地割」は、水田が開発される低い土地の部分よりも、集落が形成される高い部分で顕著に認められることから、港湾都市の町割として施工されたと考えられます。おそらく、大供本町遺跡を流れる相模川と鹿田遺跡を流れる枝川の掘削も同時に行われたと推測されます。第2次調査では、相模川の旧河道がみつかり、そこから多量の土器と共に文字を墨で書いた土器もかなり出土しています。また、相模河は、自然の川ではなく、人工的に掘削されたこともわかりました。さらに調査した部分では、「鹿田地割」の方向と同じでした。

いずれにしても、今回の調査によって、岡山城下町が形成される直前に、大供から鹿田にかけて、町割を伴う港湾都市が存在していたことがわかりました。おそらくその都市の存在が、旭川の西岸に岡山城下町を設定することになった理由の1つであったと推測されます。

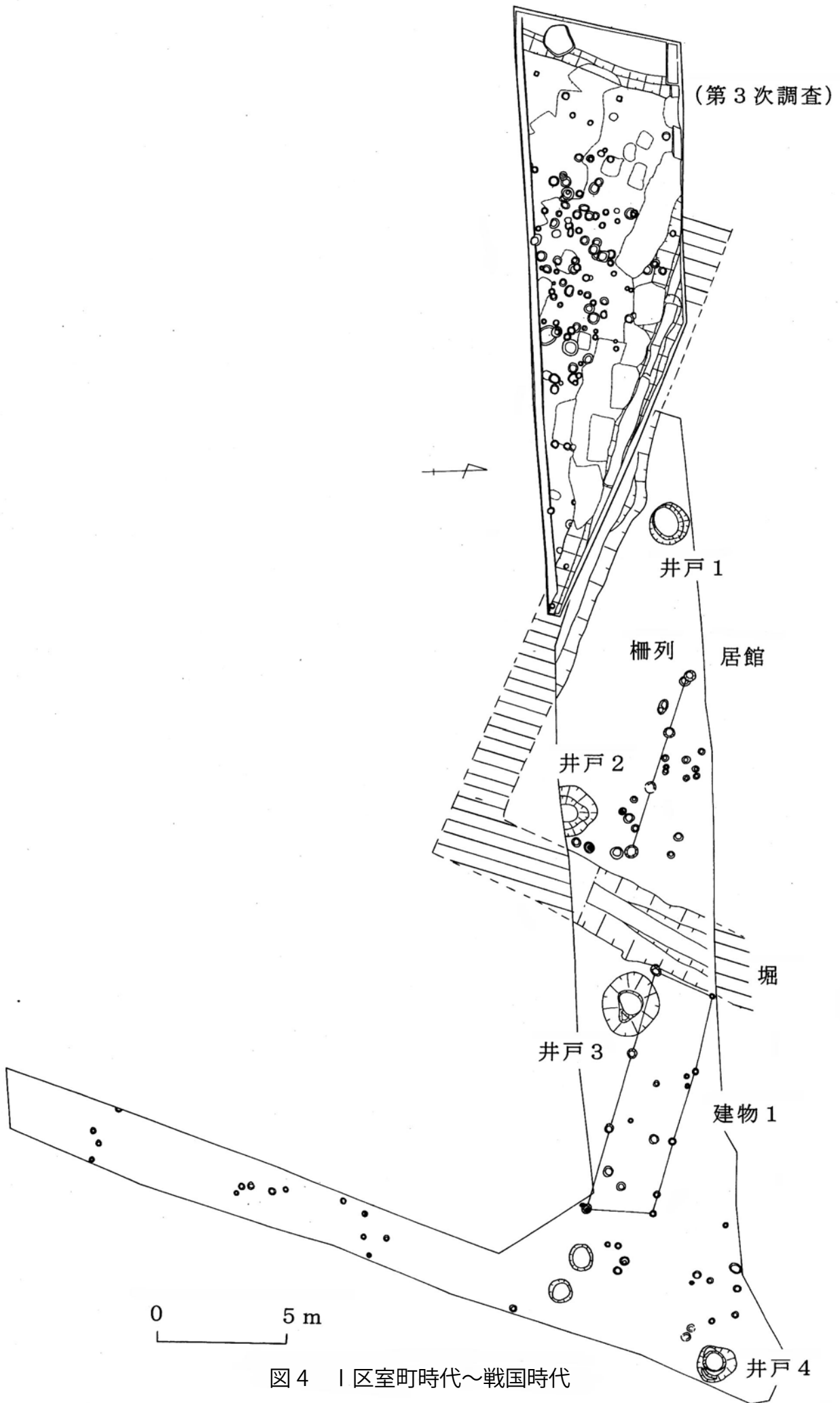


図4 I区室町時代～戦国時代

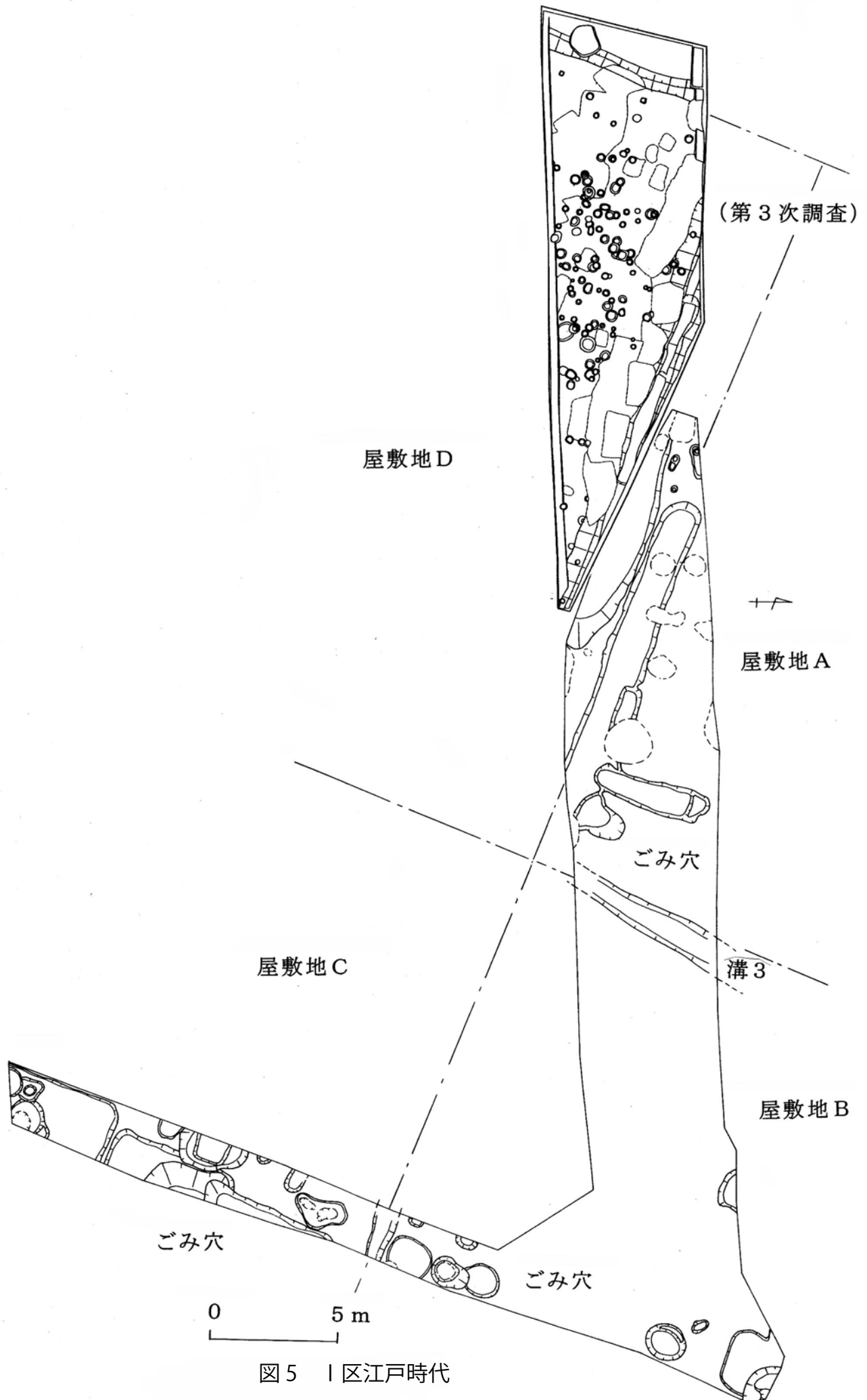


図5 I区江戸時代

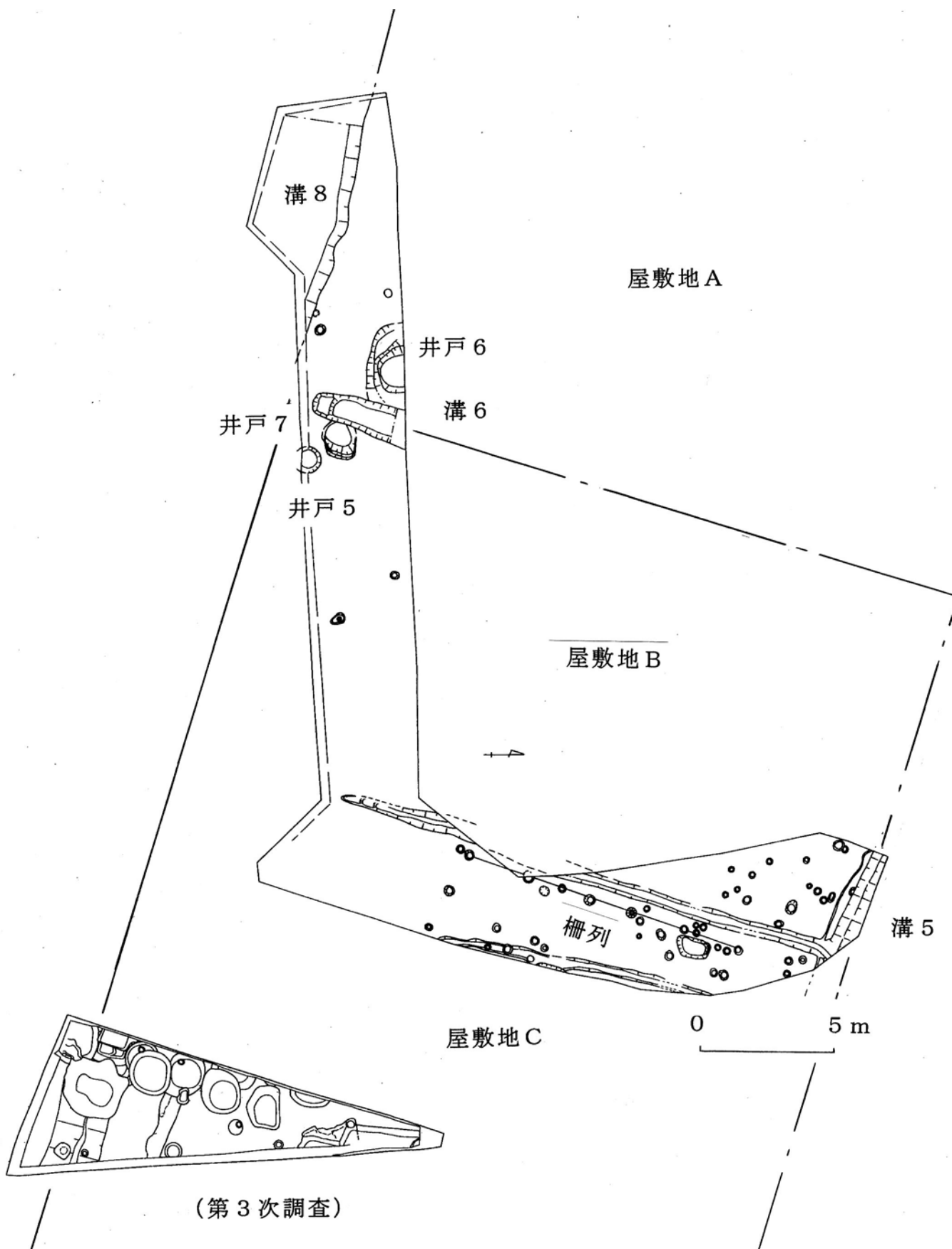
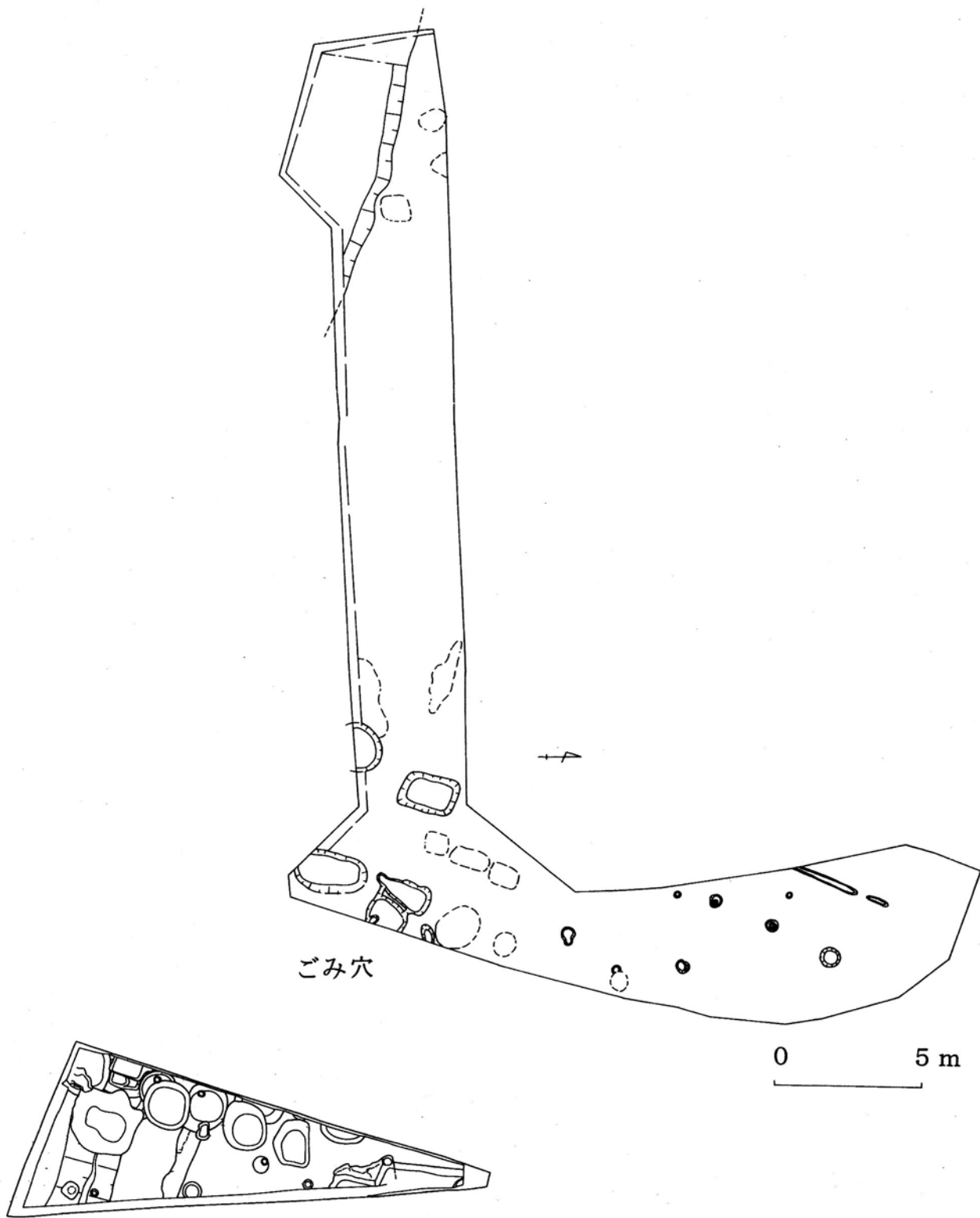


図6 II区室町時代～戦国時代



(第3次調査)

図7 II区江戸時代

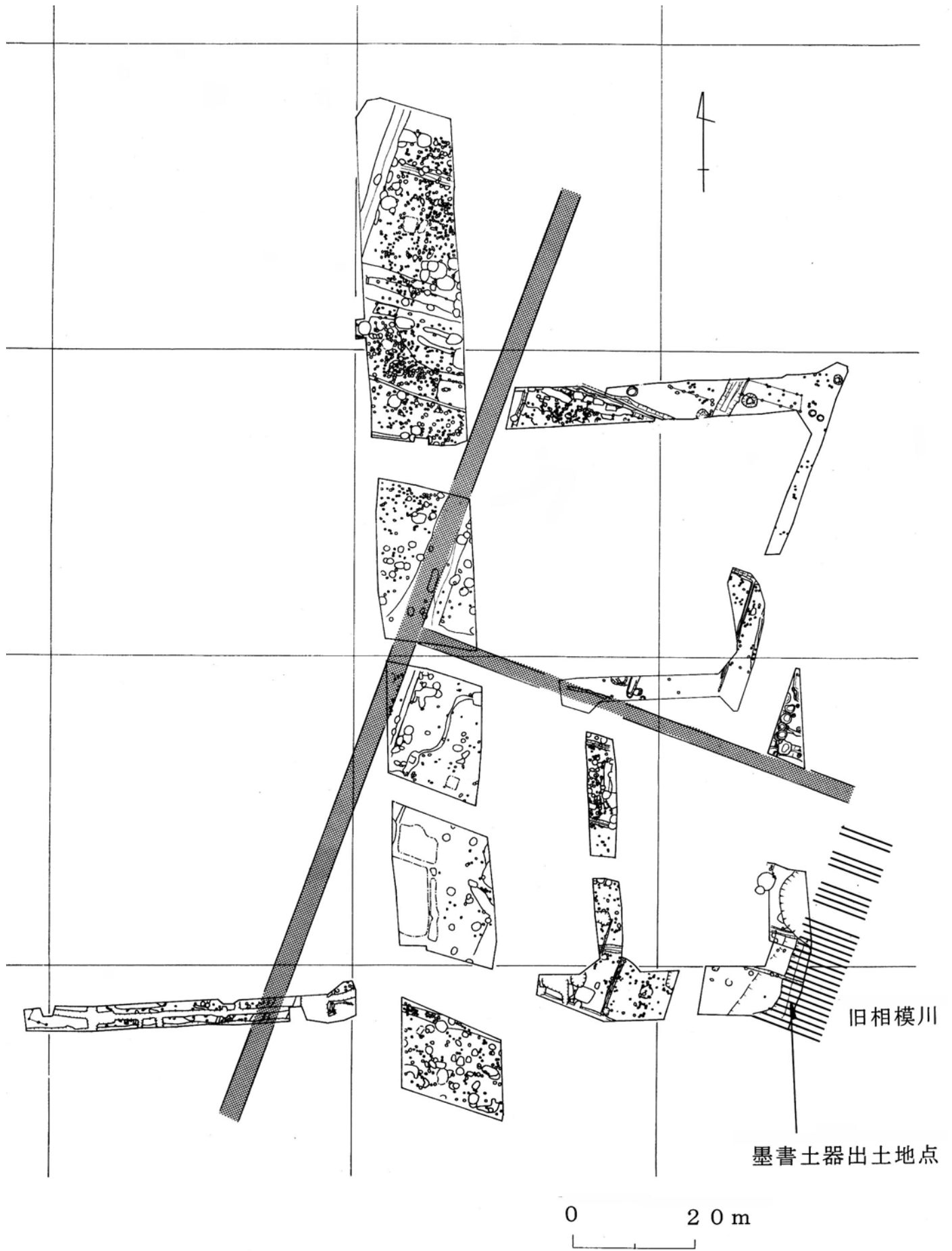
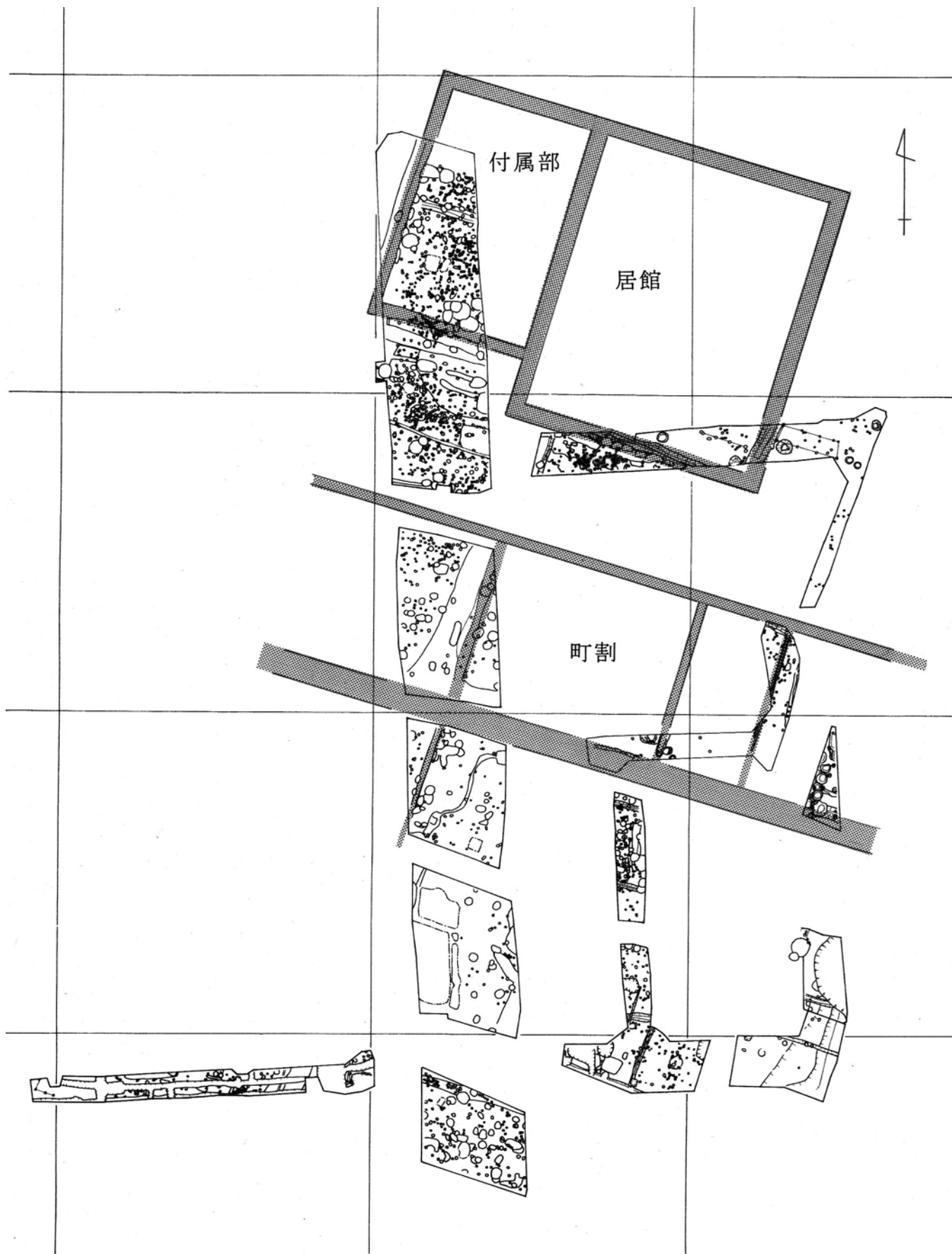


图8 大供本町遺跡全体図：平安時代前期（9～10世紀）





■ 室町・戦国時代地割

図9 大供本町遺跡全体図：室町時代～戦国時代